



植柳の風

植柳小学校 校長室便り
平成30年2月5日 NO. 82

雪舞う立春の日に



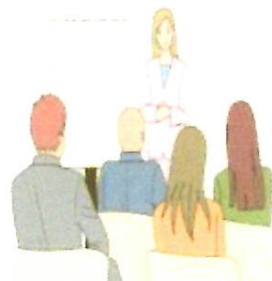
2月4日(日)、暦の上では、春を迎えた日、我が家の前庭の梅の木も白い花が左の写真のように鮮やかに咲き誇っていた。

「東風吹かばにはひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」

菅原道真の有名な句であるが、梅の花を見るたびに思い浮かんでしまう。意味は京都から左遷されるときに歌われたというから少し寂しい気もするが、それでも梅の花が極寒の中に春の訪れを知らせてくれる最初の使者であることは違いない。4日の朝は、九州地方にも強い寒気が流れ込み、時折雪が舞う厳しい寒さに見舞われたが、春は間違いなく近づいていることを実感した瞬間だった。

さて、そんな日曜日の午後は、植柳コミュニティセンターを訪れ、八代市伝統文化活性化協議会主催「植柳の盆踊 講演会」に出席した。会場には、多くの地域住民の方たちをはじめ、本校の先生方や小学6年生の姿も見られていた。

まず最初は、文化庁伝統文化課の吉田調査官の基調講演。民俗芸能は、時代の推移とともに変化することは避けられず、その時代の人々の考え方や意識、感覚によって左右されるものと定義され、継承するためには、文化財的価値や地域にとっての意味を明らかにする記録を作成したり、学校教育としっかり連携していくことの大切さを訴えられた。最後に、日本全国の神楽などの伝承に取り組んでいる市町村の事例を紹介しながら、民俗芸能は地域コミュニティに大きな役割を果たすだけでなく、地域文化の振興や学校教育・社会教育の分野でも大きな役割を担い始めていると結ばれた。



次のプログラムは、シンポジウム。本校にも何度もおいでいただいている熊大名誉教授の安田宗生先生がコーディネータを務められ、前述の吉田調査官も含めた5人のパネリストたちは、植柳盆踊り等、民俗芸能の継承に関する意見を交わされた。

熊本駅前看護リハビリテーション学院学校長 高野先生からは、「植柳盆踊りの歴史」について調べた結果を報告され、文献に残るもっとも古いものでは、1500年代に相良氏が八代地方を収めた時代に広がった念仏踊りにその起源があり、一遍上人を開祖とする時宗の影響が見られることを説明された。

鹿児島国際大学の松原名誉教授からは、「熊本県の盆踊り」と称し、植柳盆踊りの特徴として、「口説歌であり、七七七七で旋律の一節を形成していること」「ヨイヤサーヨイヤサーも含めて20拍で踊りは6拍であること」「音域が狭く、三味線や太鼓など楽器がつかないこと」等を紹介された。また、熊本県内にいろいろな形の盆踊りが広がっている様子を図でまとめてプレゼンされたので、わかりやすかった。

3番目に発表された植柳校区住民自治協議会鑄山会長からは、盆踊りに関するご自身の体験談を紹介され、昔は風呂敷を被って踊っていたことや男が女性の浴衣を着て踊ったり、男女の出会いの場として10日間も踊ったりしていたことなどを楽しそうに紹介された。

最後に意見を述べられた活性化協議会眞木会長からは、民俗芸能を伝承するためには、4つのこと、即ち「やる人(継承者)、お金(資金)、発表する場、継承するための稽古をすること」が必要であり、やる人も見る人も面白いものでないと残っていかないと力説された。

植柳小の伝統文化教育の取組を私も報告させていただいたが、植柳盆踊りは実に奥深いものだ改めて気づいた。そして、春に向けた心の体温の高まりを感じたひとときだった。